

『玉塵抄』における漢字音の 読み癖についての考察

李承英*

目次

- はじめに
- 先行研究
- 『玉塵抄』における読み癖の分布と内容
 - 読み癖の分布
 - 読み癖の内容
- 読み癖と漢字音の系統
 - ヨミクセ・クセ
 - ヨミツケ
 - ヲシツケ (ヨミ)
 - 名目(ツカイ)
- まとめ

1. はじめに

惟高妙安(1480~1567)¹⁾が元代の韻書『韻府群玉』(1334)を講述した『玉塵抄』(1598)には、惟高妙安が獨自在漢字の字音について述べたところ、つまり漢字の吳音・漢音を示しているところや「清」「濁」について注釋しているところ、また韻書の反切から音を導いて字音のことを注釋しているところなど、漢字音に関わる議論が多く見られる。そして、その中には次のように、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」²⁾といった語句を用いて、漢字

* 경북대학교 강사, 일본어학

1) 惟高の経歴は今枝愛眞(1966)により紹介しておく。諱は妙安、近江の人、夢窓派の瀑岩等紳の法をついだ。瀑岩・景徐・月舟らに學び、伯耆の山名氏にまねかれて伯耆・出雲にとどまること三十年、尼子氏とも関係をもった。のち相國寺・南禪寺に住し、鹿苑僧録をつとめた後、相國寺の光源院に退休した。詩文集『万葉集』、『韻府群玉』を抄した『玉塵』、『詩學大成』を抄した『詩淵一滴(詩學大成抄)』がある(『禪宗の歴史』、p.144)。

2) ちなみに、「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」について、『時代別國語大辭典室町時

の読み方を示しているところがある。

①ヨミクセ・クセ

(1)鳥ノコトニ止ノ字ヲカイタハイルトヨムソ、トトマルトハヨマヌソ、イルモトマルモ同コトナレドモ
ヨミクセソ、(玉塵抄・10巻p.694)

②ヨミツケ

(2)蜀ノ成都ノ者ナリ、成トヨミサウナガ、シヤウトヨミツケタソ、成一ハ蜀デハミヤコソ、(玉塵抄・1巻
p.197)

③ヲシツケ(ヨミ)

(3)永明ハエイメイトヨムヤラ、ヤウミヤウトヨムヤラ、ココラニハヲシ付ヨミニヤウメイトヨムソ、
(玉塵抄・10巻p.54)

④名目(ツカイ)

(4)敗一ハ経家(ケ)ノ名目ツカイニ不同アリ、敗ヲバイトニコル人アリ、眞乗ハスメタソ、(玉塵抄・8巻
p.629)

これらは、すべて一つの漢字をめぐる複数の読み方を示しているものである。そして、その中で必ずしも韻書などのしかるべき根拠を示すことなく、その当時における一般的な読み方と対立している慣例的な読み方を、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などといった語句を用いて示している点において共通している。本稿では、このような語句、またこのような語句でもって指定された漢字の読み方を読み癖と呼ぶことにする。

このような点に着目して、『玉塵抄』の中の「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目ツカイ」などの読み癖に関わるところを取り上げ、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などがどのような読み方に對して用いられていたのか、そして読み癖は當時どのような字音であったのかを明らかにする。そのため、読み癖と当時の漢字音資料の『日葡辭書』(1603)『文明本節用集3』(1474)『倭玉篇4』(1610)『聚分韻略5』(1612)などの字音を比較する。

代編』(1985、三省堂)は、次のように説明している。①「ヨミクセ」:一般には漢字・漢語について、その家・流派などで慣例となっている、獨特の読み方をいう。②「ヨミツケ [讀付]」: その漢字・漢語について、そう讀むことが慣例となっている、特別の読み方。→読み癖③「ヲシツケヨミ [押付点]」:自分勝手な推量・臆斷による文字の読み方。④「名目」:それぞれの事物に与えられている決まった呼び名。またある決まった言い回しや読み方などのならわしをもいう。

- 3) 中田祝夫(1983)によると、『文明本節用集』は、「…室町時代中期のもの、おそらく一六世紀の初頭のころのものであろう」という。同書は数ある『節用集』中、最古の『節用集』の一つであり、そして漢字漢語に片仮名音注を施しているのが貴重な字音資料となる。ところで、この辭書の漢字漢語の音注は、漢音=朱筆、吳音=墨筆、唐音=朱筆と色分けされている。このように當該字音の系統が示されていること、漢籍からの引用文以外のところでは、全漢字に對してその漢音が示されていることなどから、室町期字音資料としてはきわめて利用価値が高い。詳しくは、中田祝夫(1970b)、湯澤質幸(1976)参照。
- 4) 中田祝夫(1983)は、『倭玉篇』は「…特定の著者の責任のないものであるから、誰でも入手すれば、勝手自由に加筆削除といった増補改編がなされたものである」と指摘している。このような点においては辭書としての規範性に疑いを持たざるをえないが、いずれの系統の『倭玉篇』であれ、その字音の量は『下學

2. 先行研究

福島(1962)は、「連聲と読み癖」で、『毛詩抄』における「比物」の「物」を「フツ」と清んで読むように注記した例を挙げて、「漢籍読み」での読み癖について述べている。

比物—物ハ清ソ、コン便カワルイソ、ハタノトキモフツノ音テスムソ、
(毛詩抄古活字版巻10・15ウ～16オ)

彼は、主として連聲を読み癖ととらえているが、当時の読み癖というものの性格については具体的に触れてない。

また、高松(1971)は、「明」も「ベイなれどもメイト読む(玉塵)」という例を挙げ、観念的には漢音B(ベイ)でなければならないが、所謂読み癖の類で、M(メイ)の方を出したと主張し、これを読み癖と呼んでいる。

高松(1971)は、漢籍讀書音において、その当時の原則に合わないものを読み癖と呼んでいるが、その読み癖の内容や性格については具体的に述べていない。

一方、遠藤邦基(2002)は、中世から近世にかけて書かれた、日本古典の聞書類の中の、清濁、連濁、四つ仮名、開合、拗音などに關わる注釋を「読み癖」とし、その實態と内容を検討して、その史的な価値と位置づけを論じている。すなわち、例えば「つくは山、序ハカリニテ、ツクハノ『ハ』ノ字ヲ清(スミテ)ヨム也。(天理本『古今和歌集聞書』仮名序)」のような、文脈や語義の解釋には關わっていない清濁關係の注記を一括して「読み癖」と呼び、現代における清濁のとらえ方に立ってその由來や性格などを考察している。遠藤は、注釋の意図や内容などの考察という点においては、本論文とあい通じる所を持っている。

福島(1962)、高松(1971)、遠藤(2002)は、読み癖を雑多な意味内容を持つものとしてとらえているだけで、具体的に、それぞれどのようなものなのか、すなわち室町期における読み癖というものがどのような性格を持っているのかは十分論じられていない。

これらを踏まえて、李承英(2005)では、漢籍の抄物を取り上げ、室町期抄物における「ヨミクセ」「ヨミツケ」等の用語が、その当時の學問においてどのような読み方を指していたのか、ま

集』や『節用集』に比肩できるほど多い。このことや當時における漢和辭典は『倭玉篇』くらいしかないこと、いろいろな版本や寫本が作られていることなどから、當時においても相當廣く使用されていたに違いないと考えられる。本論文では慶長15年版を用いる。

- 5) 『聚分韻略』には數多くの版本、寫本のあることが知られている(奥村、1973)。本論文では慶長17年版を用いるが、奥村は、この書の字音について「概ね、漢吳音カナ、唐音カナそれぞれの定位置めいたものがあり、原則として、前者は見出し字の右側、後者は左側に付されるのである。」と述べている。このように慶長17年版『聚分韻略』は『文明本節用集』のような色分け表記こそないが、位置の違いによって、漢吳音と唐音を區別している点において、『文明本節用集』と類似する。

たどのような性格を持っていたのかを検討している6)。

しかし、李承英(2005)では、「ヨミクセ」「ヨミツケ」などの用語が当時どこでどのくらい定着していたのかなどを中心に考察しているため、その読み癖が当時においては、それぞれのどのような字音であったのか、またどのような系統の音であったのか、または当時の一般音とはどう関わっていたのかなどについてはまだ解明されていない。

3. 『玉塵抄』における読み癖の分布と内容

ここでは、李(2005)に基づいて『玉塵抄』の中で、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ(ヨミ)」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目ヅカイ」が、どのくらい分布しているのか、またどのような読み方について用いられているのかを検討する。

3.1 読み癖の分布

『玉塵抄』の中で、「ヨミクセ」と「ヨミツケ(ヨミ)」などは32例あった。

『玉塵抄』の中で「ヨミクセ」と「ヨミツケ(ヨミ)」などの用語の分布を示すと、【表1】となる。

【表1】読み癖の分布

ヨミクセ	ヨミツケ	ヲシツケ	名目ヅカイ	計
7(3)	13	6	6	32

なお、この中には、漢字音に関わるもののほか、訓すなわち「訓読み」「読み下しの順序」に関わるものが3例あるが、本稿では漢字音に焦点を絞って、考察を進めていくことにする。

3.2 読み癖の内容

3.2.1 ヨミクセ・クセ

①『史記』『漢書』での独特の読み方

- 6) 李(2005)では、奈良期以降、室町期までの日本古典、物語や説話、狂言、謡曲、キリシタン資料、抄物などを調査し、「ヨミクセ」「ヨミツケ」等の使用の歴史について次のように述べている。「ヨミクセ」「ヨミツケ」等は、室町期以前までは読み方に關わってあまり用いられることがなかったこと、また室町期では、抄物や歌學の聞書類で用いられていることなどから、歌學も合わせて學問の場において比較的よく用いられていた語でなかったとしている。

次のように、『玉塵抄』の中で「ヨミクセ(クセも含む。以下同じ)」は『史記』『漢書』での獨特の読み方に用いられている。

- (5)當ノ字ヲヨマヌソ、音ニヨムソ、此ヤウナコト史漢ニクセ多ソ、不學ナレハムサトヨムソ、(玉塵抄・3卷 p.107)
- (6)刑當ハ刑當(アタル)トハヨマヌソ、音ニ當ストヨムソ、漢書ノヨミクセソ、知ラヌ人ハ當(アタ)トヨマルソ、史記モ漢書モ漢書ハ史記ニカワツタヨミヤウアルソ、史漢ハ學セイ文字ノカハカリテオンデハカシイコト多ソ、(玉塵抄・6卷p.677)

(5)(6)から、『漢書』『史記』には、特定の漢字について、特に根據があるわけではないが、一般的な読み方とは違った慣例的な読み方があること、そして、その慣例的な読み方を「ヨミクセ」と呼んでいることがわかる。そして、(5)「不學ナレハムサト」や(6)「知ラヌ人ハ」「カワツタヨミヤウ」「學セイ」などから、「ヨミクセ」はそれぞれの漢字について特別に學ばなければならないものだったことが知られる。

「ヨミクセ・クセ」は、訓と音の両方に關わって、その當時の一般的な読み方とは對立する、『史記』『漢書』という歴史書における慣例的な特別の読み方を指す語であったと考えられる。

これに關連して、『漢書』『史記』における漢字の字音の特別な読み方について、次のような講述がある。

- (7)準ハハナノコトソ、準ハシユントハツネノ音ソ、セツ音ヲメツラシウ付タソ、史漢テハメツラシイ音ヲホユルト、景徐漢書ノ講ニアツタソ、(玉塵抄・8卷p.470)
- (8)準ハ漢ノ高祖ナリ、隆一ハハナダカナト云心ソ、隆ハタカシトヨムソ、準ハハナナリ、準ハセツト漢書デハヨムナリ、ジユントモヨムソ、景徐ノ漢書ノ談義ニ史記漢書ハアタラシイ音ヲ付テヨムモノソ、本々ノ音ハランデモナイソ、準ハ鼻ナリ、(玉塵抄・8卷p.431)

これらの抄文の中には「ヨミクセ」という語はない。しかし、これらは、史漢の書では「メツラシイ音」「アタラシイ音」「別ナ音」を付けるということ、つまり、しばしばその當時の一般的な読み方とは異なる特別な読み方が取られていたことを示している。

以上、「ヨミクセ・クセ」については、『史記』『漢書』という歴史書における慣例的な特別の読み方であること、讀書音において、時にはその當時の一般的な読み方と對立するものだったことが明らかになった。なお、『史記』『漢書』についてだけ「ヨミクセ」が現れていることから、當時の讀書音においては、『史記』『漢書』については一部特別な読み方が取られていたことが知られる。

3.2.2 ヨミツケ

①連濁による特別な読み方

- (9)匡衡ノ時ヲスンテヨム人モアルツ、詩文ノヨミヤウノ法ハコトコトスムソ、サレドモマタヨミツケアリ、上ノ字ガハヌレハ下ノ字ヲニコラスルソ、此ハ教家ニウムノ下ハ必ニコルトイワルルソ、サレトモカナニシモノウノ点アリ、ムノ点アルニ又ニゴラヌモ多ソ、コマカニヨウカンバンセヌ人ハシラヌソ、此ノツレヲ眞乗ニ多ウタツネタソ、(玉塵抄・5巻p.298)

上の例では、当時漢字の読み方において「詩文」と対立していた「教家」の、「ウムノ下ハ必ニコル」という連濁化についての規則を、「ヨミツケ」としている。これは、「ヨミツケ」は、「詩文」における一般的な漢字音の読み方と対立していた読み方を言う語であることを示している⁷⁾。

②漢音以外の字音を用いる特別な読み方

- (10)成都セイトヨマウスカ、ジャウト吳音ニヨミツケタソ、(玉塵抄・玉9巻p.86)
(11)大同(スムスム)ト云ソ、梁ノ武帝ノ年号ニ大同ト云アリ、ソレハ吳音ニダイドウトレモノゴツテ、ヨミツケタソ、(玉塵抄・1巻.60)

(10)は、「成」の場合、漢籍の一般的な読み方は漢音の「セイ」であるが、「成都」のような地名の場合は、吳音の「ジャウ」に「ヨミツケ」ていたことをそれぞれ示している。(11)は、「大同」も、漢籍では普通「タイトウ」と清音に読んでいたが、年号の場合は特に「ダイドウ」と兩方吳音の濁音に読んでいたことを示している。

これらの漢字における「ヨミツケ」は、一般の讀書音とは対立している読み方、つまり「書名」「人名」「所名」「年号」などにおける特別な読み方を指しており、そしてその具体的な音は當時における吳音であるという点で共通している⁸⁾。

③慣用的に用いられている読み方

韻書などの根拠も示すことなく、また、吳音、漢音という分類とも関わりなく、ただ単にあ

7) ちなみに、『詩學大成抄』には、「江」字に関わる連濁の説明が見られる。
江(スム)州ト江ヲスムソ、九江^ハ江ヲニコルソ、九(キウ)トウエニ、ウノヨクリカナアルホドニソ教家ノサダメハ、ウムノ下(シタ)ハ字ノコエ本ノ字スタ音ナレドモノコルソ、(詩學大成抄・上巻p.274)
これは、「ヨミツケ」は、「詩文」における一般的な漢字音の読み方とは異なることを示している。

8) これに関連し、『玉塵抄』の別のところで、次のように吳音と漢音の伝來とその使用場所について述べている。劑ハ漢音ニハセイトヨムソ、醫書ニ吳音ニナニモヨムソ、書ノ名モ人ノ名モ所ノ名モ年号モコトコトク吳音ソ、吳ノ國カラ早フ、醫書ガ渡タホトニソ、(玉塵抄・7巻p.33)

る漢字について読むべき字音を示しているだけの「ヨミツケ」もある。

(12)大戴(ダタイ)礼大ハタイトヨマヌソ、大(ダ)戴トダトヨムソ、ヨミツケソ、教ニ大虚空ト云コトアリ、ソレモ大(ダイ)トヨマヌソ、大(ダ)虚トヨムソ、ソレツレソ、(玉塵抄・2巻p.534)

(12)「大」は、一般の読み方は「タイ」であるが、「大戴」「大虚」の場合は、「ダ」と「ヨミツケ」でいることをただ単に示しているにすぎない。

以上、『玉塵抄』における「ヨミツケ」は、①漢籍での正統な讀書音に對立している特別の読み方、主として仏家における連濁法によった音、②「書名」「人名」「所名」「年号」などにおける特別な読み方、多くは吳音系の音③時にその由來、根據もなく、したがって、正統な讀書音でもない、慣用的に用いられている音、などである。

3.2.3 ヲシツケ(ヨミ)

①學問、特に『史記』『漢書』を勉強しない人の推量による読み方⁹⁾

(13)殺ハサツトヨムソ、史記漢書ヲシラヌ人ハ自見シテヲシツケヨミニ自殺(セツ)トヨマルルソ、(玉塵抄・4巻p. 213)

(14)此ハミチ人トヨメルソ、上ノ食客ミチ人ハ、史漢ノ書テハミチ人チノ字モスムソ、人ハシントヨムソ、物々ニヨミヤウアリ、スミニコリノ定リアリ、學問セヌ人ノヲシツケヨミハヤカテキコルソ、(玉塵抄・7巻p.593)

(13)は、「殺」の場合、『史記』『漢書』での読み方、つまり正統な讀書音は「サツ」であるが、「ヲシツケ(ヨミ)」では「セツ」と讀まれていること、(14)は「學問セヌ人」の読み方を示している。

②叢林での特別な読み方

「ヲシツケ(ヨミ)」は、學問をしていない人の、排除の對象となる読み方ではなく、「叢林」での読み方を示していることもある。

(15)攝論ト云アリ、攝大乘論ト云大乘ノ教ヲアツメヨセタ心ソ、此ヲ攝大乘トヨム人アリ、眞乗ハセウト

9) 詩學大成抄にも次のように「ヲシツケヨミ」が見られる。

二字ノ中ヲハ吳音ニヨミ、下ノ字ヲハ漢音ニ讀ム類多ソ、物ノ本ノ名ニモ此ルイ多ソ、ソレヲ師傳セイテ、ヲシツケテヨメハワカシイソ、自見ノ學ト云テ人ノワラウコトソ、(詩學大成抄・上巻p.575)

これは、「師伝」によらない「自見」つまり自分勝手な読み方を「ヲシツケ(ヨミ)」としている。なお、「自見ノ學ト云テ人ノワラウコトソ」から、「自見」による「ヲシツケヨミ」は嘲笑の對象となっていたと見られる。

ヨメタソ、セツツツメハセラレヌソ、ヨミヤウノチガウコト叢林ト教家トニ多ソ、叢林ノハヲシツケヨ
ミソ、経教ハ眞乗ノガ本ソ、諸老モサウヲシナツタソ、ソレモドチュモヨムコト多ソ、南都ノ東大興
福三井ノ名目ツカイヨミヤウノカワルコト多ソ、大ガイ眞乗ニキイタソ、(玉塵抄・5巻p.287)

(15)から、その当時「叢林」と「教家」は、ある漢字の音において対立しているところがあったことがわかる。

以上、「ヲシツケ(ヨミ)」は、「経家」の正統な読み方と対立することもある「叢林」の読み方で、特にその根拠はないけれども、「叢林」では必ずしも排除の対象はならず、ある程度の範囲において使用されていたものだったと考えられる。

3.2.4 名目(ツカイ)

『玉塵抄』の中で、「名目(ツカイ)」は「経教」での決まった読み方、宗派における独自の慣例となっている読み方で用いられている。

①「経教」での決まった読み方

(16)敗一ハ経家(ケ)ノ名目ツカイニ不同アリ、敗ヲバイトニコル人アリ、眞乗ハスメタソ、(玉塵抄・8巻 p.629)

(17)宗ノ字ハ経教テハシユトヨミ、シウトヒイテモヨムソ、ソウトハヨマヌソ、…宗(シウ、シユ)トヨムハ名目ツカイノ不同ナリ、(玉塵抄・1巻p.535)

なお、(17)「宗」の場合、『文明本節用集』では吳音「しゆ(931・2)」、漢音「シユウ(931・2)」、「ソウ838・7」となっているので、「シウ」「シユ」は「経教」関係特有の「名目(ツカイ)」であったことがよく分かる。

②宗派における独自の慣例となっている読み方

(18)眞乗ハ南都ニイテ教學アリ、南都ノ名目ノツカイヤウノヒキヤウモカワリタソ、京ノ山寺兩門ノ名目聲ノヤウチカウコト多ソ、眞乗ハ京ヲ談義ニ南都ノ花嚴宗法相宗西大ノ律部ノ談義ニ南都ノヲ多ウツカワシムタソ、(玉塵抄・4巻p.329)

(19)南都ノ東大興福三井ノ名目ツカイヨミヤウノカワルコト多ソ、大ガイ眞乗ニキイタソ、(玉塵抄・5巻 p.286)

(18)から「名目(ツカイ)」については、「花嚴宗」「法相宗」などの「南都」と、「三井寺」「山寺兩門」つまり天台宗が漢字音において対立していることが多いこと、そして「眞乗」は「南都」の「名

目」を優先していたことがわかる。

以上、『玉塵抄』における「名目(ツカイ)」は、叢林や一般社会とは違った「経(教)」での決まった読み方、しかも、その中の南都仏教と天台宗それぞれにおいて、さらには、南都の各寺、天台宗の各宗派ごとに決まっていた慣例的な読み方であることが分かる。

4. 読み癖と漢字音の系統

ここでは、3節での読み癖の内容についての考察を踏まえて、「ヨミクセ」、「ヨミツケ」、「ヲシツケヨミ」、「名目ツカイ」は、その当時においては、それぞれどのような音であったかのかを検討したい。そのため、当時の漢字音資料の『文明本節用集』『倭玉篇』『日葡辞書』『聚分韻略』での音と比較し、それぞれ、どのような系統の音であったのか、または当時の一般音との関わりを検討してみたい。

4.1 「ヨミクセ」

「ヨミクセ」では、漢字音の読み癖に関わる漢字は、「説」の字しかない。

(20)遊説(セイ)ノ士ナリ、説ハゼイトヨムソ、トク心デハアルマイ、セツトハ史漢ノヨミクセテヨマヌソ、
(玉塵抄・8巻p.360)

この「説¹⁰⁾」について、『廣韻』では「舒芮切(祭)去」「失蒸切(薛)入」「弋雪切(薛)入」で、『韻鏡』では「舒」も「失」も齒音清音字、「弋」は喉音清濁音字なので、その日本漢字音としては「セイ」、「セツ」、「エツ」が期待される。しかし、室町期当時における日本での一般的な読み方は、『廣韻』で言えば「舒芮切」「弋雪切」に対応する「セツ」「エツ」しかない。また「説」は、『文明本節用集』では、「セツ」(1092・5)「エツ」(395-2) (朱筆のかなはカタカナで、墨筆のものはひらがなで示す。以下同じ。なお、この書では朱筆は漢音唐音を、墨筆は吳音と訓を表わしている)、『倭玉篇』でも「セツ」(140-4)となっており、『日葡辞書』(756)でも「セツ」の音しか挙げられていない。

10) この「説」については、『玉塵抄』の別のところでも「史漢ノ書」での読み方が示されている。

①口ヲタタイテサキヲカラストモ云テアルキマワル者ヲ遊説ト云ソ、説ハセツトハヨマヌソ、セイトヨムソ、セイノ音ヲ付タソ、史漢ノ書テサウヨムソ、(玉塵抄・5巻p.59)

②漢ノ列向ガ説(セイ)苑アリ、説(ゼイ)トヨメルソ、セツハヨマヌソ、遊説(セイ)説(セイ)客ナトモゼイトヨムソ、(玉塵抄・4巻p.218)

この例でも「説」は、「史漢ノ書」では「セイ」と読んでいることを述べている。

このような事実を踏まえると、(20)は、「説」の室町期當時における一般的な読み方は「セツ」であるが、史漢などでは「セイ」という特別な読み方がとられていたことを示しているのではないかと推察される。

4.2 ヨミツケ(ヨミ)

『玉塵抄』における「ヨミツケ」と當時の漢字音資料での字音を示すと、次の【表2】となる。

【表2】「ヨミツケ(ヨミ)」と字音

該当漢字	玉塵抄		廣韻	文明本		倭玉篇	日葡辭書	聚分韻略
	ヨミツケ	對立する音		漢音	吳音			
①淮	エ	クワイ ワイ	戸乖反	ワイ				ワイ
②會	エ	クワイ	戸乖反	クワイ	エ	クワイ エ	カイ エ	クワイ
③成	ジャウ	セイ	是征切	セイ ウ	ジャ	セイ ジャウ	セイ ジャウ	シン
④大(戴)	ダ	タイ	唐佐切	ダイ タイ	ダ	タイ ダイ	タイ ダイ	タイ ダイ
⑤江	ゴウ	コウ	古雙切	コウ		カウ	コウ ゴウ	カウ
⑥爾	ニ	ジ	兒氏切	ジ	ニ	ニ ジ	ジ	ニ シ
⑦汝	ニョ	ジョ	人渚切	ジョ	ニョ	ジョ ニョ		ショ
⑧烏	ヲウ	ウ ヲ	哀都切	ウ エ		ウ	ウ エ	ウ
⑨車	キョ	シャ	昌遮切 九魚切	シャ		シャ	シャ	キョ シャ

『文明本節用集』で吳音が見いだせなかった①淮②江⑧烏⑨車を除くと、『玉塵抄』における「ヨミツケ」は『文明本節用集』の吳音と一致している。このことと、「ヨミツケ」が漢音と一致しているものは一つも見られなかったことから、3節での考察通りに、「ヨミツケ」は吳音系であることが確認される。また、『倭玉篇』『日葡辭書』の場合は、「ヨミツケ」とそれと對立する音としてされている字音の両方が挙げられている場合が多い。このことから、『ヨミツケ』は當時一般にある程度用いられていたことが言える。ただし、⑧烏「ヲウ」の場合、どこの資料にも見られないことから、當時の一般音ではないと考えられる。

以上、『玉塵抄』における「ヨミツケ」は、漢籍での正統な讀書音に對立している特別な読み方、多くは吳音系の音、時にその由來、根據もなく、したがって、正統な讀書音でもない、慣用的に用いられている音であると考えられる。

4.3 ヲシツケ(ヨミ)

【表3】「ヲシツケ(ヨミ)」と字音

該當漢字	玉塵抄		廣韻	文明本		倭玉篇	日葡辭書	聚分韻略
	ヲシツケ	對立する音		漢音	吳音			
①殺	セツ	サツ	所八切	セツ		セツ	セツ サツ	サツ
②卽	ソク	シヨク	子力切	ソク		ソク	ソク	ソク
③攝	セツ	セウ	書涉切	セツ		セツ セウ	セツ セウ	セウ
④分	ブン	フン	府文切 扶問切 方文切	フン ブン		ブン	ブン フン	フン
⑤明	メイ	ミヨウ	干憬切 武兵切	メイ ミヨウ		メイ ミヨウ	メイ ミヨウ	ミン (唐音)
⑥鼓	コ	ク	公戸切	コ		コク	コ	コ ク

『玉塵抄』における「ヲシツケ(ヨミ)」は、『文明本節用集』の漢音と一致していることから、當時の讀書音で、漢音であることが確認された。また、『倭玉篇』『日葡辭書』では、「ヲシツケ(ヨミ)」とそれと對立する音兩方が擧げられている場合が多い。①殺②卽③分は、『倭玉篇』では、一つしか擧げられてなく、それは「ヲシツケ(ヨミ)」と一致する。また、『日葡辭書』と『聚分韻略』ともほとんどの場合、一致している。このことから、「ヲシツケ(ヨミ)」は當時讀書音としても一般音としても用いられていたことが分かる。

4.4 「名目ヅカイ」

【表4】「名目ヅカイ」と字音

該當漢字	玉塵抄		廣韻	文明本		倭玉篇	日葡辭書	聚分韻略
	名目ヅカイ	對立する音		漢音	吳音			
①辟	ヒヤク	ヒヤク	必益切 房益切			ヘキ ヒヤク		ヘキ
②敗	バイ	ハイ	北邁切 補邁切	ハイ		ハイ	ハイ	ハイ
③請	ジャウ	セイ	七情切 疾姓切 親井切	セイ ジャウ		セイ シヤウ	シヨウ	セイ
④蘭	レン	ラン	落干切	ラン		ラン	ラン	
⑤宗	シウ	シュ	小相切	ソウ シュ		ソウ シウ		ソウ スン

「名目ヅカイ」は、③請「ジャウ」が『文明本節用集』の吳音と一致しているだけで、『日葡辭書』と一致するものは一つもない。このことから、当時の一般音としてはあまり用いられていないと考えられる。「名目ヅカイ」は宗派ごとの慣用的な字音であるから、讀書音でもなく、一般音ではない特別の音であったことが分かる。

5. まとめ

これまで、『玉塵抄』における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などの読み癖がどのような読み方において用いられていたのか、また、読み癖と当時の吳音・漢音との関わりや讀書音、一般音との関わりなども交えながら考えてみた。

当時の漢字音資料との比較の結果から、「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ヅカイ)」それぞれの漢字音と一般音、讀書音との関係をまとめると、次のようになる。

- a. 「ヨミクセ」は、史漢などで特別な読み方であり、当時の漢字音との比較から、一般的な讀書音とも一般音とも異なっている。
- b. 「ヨミツケ」は、漢籍での正統な讀書音ではないが、当時一般には広く用いられている音であった。なお、吳音系の音が多く、唐音を含むという点を重視すると、「ヨミツケ」の音は非漢音と言うべきことになる。
- c. 「ヲシツケ(ヨミ)」は叢林における特別な讀書音を言う。「ヲシツケ(ヨミ)」は漢音系の音で、当時讀書音としても一般音としても用いられていた。
- d. 「名目(ヅカイ)」は、讀誦音に関わる、旧仏教各宗派の慣例的な読み方で、讀書音でもなく、一般音ではない特別の音であった。

「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」は、当時の讀書音、または一般音としては用いられていたが、漢籍での正統な讀書音には対立している特別の読み方であったことがわかった。また「ヨミクセ」「名目ヅカイ」は、一般音とは離れており、それぞれ『史記』『漢書』での特別の詠み方、仏教の宗派ごとの慣例的な読み方を言う語として用いられていたことがわかった。

【参考文献】

- ・李承英(2002)『室町時代における吳音と漢音—『玉塵抄』を中心に—』日本學報53輯 韓國日本學會
(2005)『室町期抄物における『ヨミクセ・クセ』『ヨミツケ』『ヲシツケ(ヨミ)』『名目(ツカイ)』
—用語の分布と意味—』『日本語の研究』第1巻1号 (『國語學』通卷220号)日本語學會
- ・今枝愛眞(1955)『玉塵の著者について』『日本歴史』84
(1966)『禪宗の歴史』改定増補版 至文堂
- ・奥村一雄(1973)『聚分韻略の研究付古本四種影印慶長版總索引』風間書房
- ・川瀬一馬(1986)『増訂古辭書の研究』雄松堂出版
- ・來田隆(2001)『抄物による室町時代語の研究』清文堂
- ・高松政雄(1971)『漢音—文明本節用集の検討』崎阜大學教育學科 第20号
- ・中田祝夫(1970a)抄物大系別刊『玉塵抄』(國立國會図書館本) 勉誠社
(1970b)『文明本節用集研究並びに索引』風間書房
(1971)『古本下學集七種研究並びに總合索引』風間書房
(1983)『日本の古辭書』『古語大辭典』『附録』小學館
- ・福島邦道(1962)『連聲と読み癖』『國語學』52
- ・松井利彦(1971)『近世漢學における漢字音の位相』『國語國文』40
- ・柳田征司(1975)『詩學大成抄の國語學的研究研究編』清文堂
(1998)『室町時代語資料としての抄物の研究』武藏野書院
- ・湯澤質幸(1986)『唐音の研究』勉誠社
(1996)『日本漢字音史論考』勉誠社

【資料】

- 大友信一・木村晟(1998)『韻府群玉』(國立公文書館内閣文庫藏古活字版)大空社
ジョアン・ロドリゲス著(1955) 土井忠生譯『日本大文典』三省堂
土井忠生外編 (1980)『邦譯日葡辭書』岩波書店
中田祝夫(1970)『文明本節用集研究並びに索引』勉誠社
中田祝夫・北恭昭共編(1966)『慶長十五年版倭玉篇研究並びに索引』勉誠社
中田祝夫(1970)抄物大系別刊『玉塵抄』(國立國會図書館本) 勉誠社
馬淵和夫(1970)『韻鏡校本と廣韻索引新訂版』嚴南堂
柳田征司(1975)『詩學大成抄の國語學的研究 影印編上下』清文堂

要 旨

室町期抄物『玉塵抄』には、慣用的に用いられていた漢字、漢語の読み方について「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などと言う語が見出される。『玉塵抄』における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などの読み癖がどのような読み方において用いられていたのか、また、読み癖と当時の吳音・漢音との関わりや讀書音、一般音との関わりなども交えながら考えてみた。その結果、次のようなことが明らかになった。①「ヨミクセ」は『史記』『漢書』での特別な読み方を言う語で、一般的な讀書音とも一般音とも異なっている。②「ヨミツケ」は、漢籍の漢語や人名・地名などに広く用いられていた語で、漢籍での正統な讀書音ではないが、当時一般には広く用いられている音③「ヲシツケ(ヨミ)」は、『史記』『漢書』を勉強していない人の読み方を言う語で、当時の讀書音としても一般音としても用いられていた音④「名目ツカイ」は、平安初期以前に成立した旧仏教や公家その他に伝統的に伝わっていた読み方を言う語で、讀書音でもなく、一般音ではない特別な音であった。

キーワード：読み癖、讀書音、一般音、吳音・漢音、漢字音の系統

투 고 : 2005. 5. 31
1차 심사 : 2005. 6. 11
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所: 경북 경산시 진량읍 선화리 운성1차아파트106동 1502호
電 話: 010-6764-0812
e-mail : sungyoungi27@naver.com